

トラック1

最初は一定程度会話はするが距離をあけがちなキャラクター感を表現。

閉鎖的な田舎に嫌気がさしていたところに、東京からの転校生が来たということで主人公に興味を持つようになる。

このトラックでは会話してる感覚を強く出したいです。

SD:授業中、教室での話し声

SD:カバンを机において着席する、椅子のきしみ

【位置::やや右 距離::中】

(着席しながら、あまり興味のないような感じ)

……ん、つと。

……ん。

……あれ、君は？

【位置::中 距離::中】

……ああ、転校生。

今日から？

ふーん、そうなんだ。

そういえば、この席。ずっと空いてたつけ。

うん、あまりここに来ないから、今知った。

ま、いろいろあつてさ。

……あぁごめん、私。清水愛芽。

愛が芽生えるって書いて愛芽。

よろしくね

(少し素になって微笑む)

ふふっ。フルネームって。

固くなりすぎじゃない？

まあ、呼び方なんてどうでもいいけどさ。

でも、そんなに畏まってるって、浮いちゃうんじゃない？

うん、この人、閉塞的だからさ。

最初に輪に入っとかないと。

(自嘲気味に笑う)

ま。私が言えたことじゃないけど。はは。

(徐々に興味を示していくが、距離はあけるように)

ふうん、それにしても転校生かぁ。転校生。

いきなり知らない人が隣にいるの、こんな感じなんだ。

うん、こんな田舎。

他所(よそ)さまがくるなんて、めったにないから。

なんかちよっと、不思議な気分。

どこから来たの？

この辺？

(どうせこの辺だろうと予測していたから素のリアクションで)

えっつ、東京？！

ああごめん、いきなり大きな声出しちゃって。

(少し不穏な感じで、言いづらい夢とかを抱えているように)

ちよつと、うん、懂れとか、ね。

(距離を縮めていく)

へえ、ふうん。でもそっか。

そしたら、ここにきてびっくりしたんじゃない？

何にもないでしょ、ハニィ。

あるのは山と、田んぼと、たまーにくるお客さん用の古いペンションくらいです。

少し歩くだけでカエルとか蟬とか、ちっちゃな猫ちゃんの声も聞こえてくるしき。

ふふっ。それが落ち着くって。

なんかおじさんみたいな事言うんだね、君。

でもまあ、たしかに。それはあるかも。

私も、疲れるとついつい何にもないのに出かけたりする。

ん、けど、そっちだとほら、

いろんな音楽が鳴ってたりするんですよ？

(純情な少女感)

アイドルとか、ロックバンドとか、いろんな。

そっかあ、私、君に興味湧いてきた。

うん、だって、私の知らないこととか、いっぱい知ってそうだし。

(普段の環境に辟易としてるんだなという感じで、軽く不満をぶつけるみたいな)

クラスで聞こえてくる話題って、いつも同じ感じで。

なのにさ、その輪に入らないと疎外されちゃうっていう。

(はにかむ)

でも、君はみんなと違いそうだし。

というか、なんか、私を見てるみたいで、すごく新鮮。

ふふっ。

(珍しく人に興味が出たように)

ええ、じゃあさ。

君の話も聞かせてよ。

うん、君の地元のことじゃなくて、プライベートの。

自己紹介、聞き逃しちゃったからさ。

(すこしからかうような温度)

大丈夫だよ、あの先生、おばさんだからさ。

私達のことなんて、何も見えないって。

多分。

ほら、例えば、何が好きなの？

向こうだといろんな娯楽があるんだから、

一つくらい好きなの、あるでしょ？

(相槌)

へえ、ふむふむ。

アニメ……？

アニメ。

ふくん、そっか。

私は詳しくないけど、この前やってたあれ……

なんだっけ……

えっと、魔法少女だけどなんか変わってて。

たしか、相手を黄泉送りにするの……。

(必死に話す主人公をみてかわいがるように)

ああ、そうそう、それぞれ。

ふふっ。

いきなり饒舌に。

本当にアニメ、好きなんだ。

君の笑った顔、なんか可愛いね。

畏まってるよりさ、ほら。

先生

「ちょっと、その二人。

先ほどから話し声が聞こえますよ。

（愛芽さん、その子は転校したばかりなんですから。

あまりからかわないでくださいね。」

S田：教室ざわつく

【位置：右 距離：近】

ふふっ、ちゃんと見られてたみたい。

（机に肘をつけながらぶくっとはほぎいぐらませる）

ごめんごめん。

もう。

せつかくいいところだったのに、やっぱりあの先生苦手。

……ね。

授業終わったらさ、また話聞かせてよ。

君のその感じ、面白いからさ。

ん、じゃ、よろしくね、今後も。